

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19520223  
 研究課題名（和文） ルネサンス期イタリアにおける活字印刷と英雄詩の文体との関係  
 研究課題名（英文） The relationship between typography and style of heroic poems in the Italian Renaissance  
 研究代表者  
 村瀬 有司（MURASE YUJI）  
 大阪大学・世界言語研究センター・准教授  
 研究者番号：10324873

## 研究成果の概要（和文）：

ルネサンス期のイタリア詩人、プルチ、アリオスト、タッソの英雄詩を対象に、詩句の跨りという現象に着目して研究を行なった。この時代の英雄詩は 1 行 11 音節という定型に従っている。しかし一文は 11 音節という大きさに収まりきらず、しばしば次行に跨る。この詩行の分断は流麗な音の流れを損ない、聴覚に基づく詩の理解を困難にする。本研究はこの現象を活字印刷の視覚的要素の現れと考え、その頻度を見ることで英雄詩の文体の相異を整理した。

## 研究成果の概要（英文）：

This research considered changes of the style of Renaissance heroic poem, analyzing the enjambment in the works of Pulci, Ariosto and Tasso. They used the verse of 11 syllables (the hendecasyllable). However, a sentence often straddled the next line, breaking the syntactic unit by the end of the line. If this division occurs frequently, the smooth flow of verse will be disturbed and an understanding of the heroic poem by hearing will often become difficult. By investigating the frequency of appearance of this phenomenon, this research evaluated the differences of the style.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・文学・英米・英語圏文学

キーワード：トルクァート・タッソ、アリオスト、詩行の跨り（アンジャンブマン）、騎士物語、叙事詩

## 1. 研究開始当初の背景

本研究申請時の背景は次のとおりである。

申請者はここ数年来、16 世紀後半の詩人トルクァート・タッソの叙事詩『エルサレム解放』を精読し、この作品に見られる特徴的な

文体に着目しながら研究を進めてきた。『エルサレム解放』は1行11音節、1連8行という定型に則っている。この詩形は、15世紀から16世紀のイタリアの騎士物語・叙事詩のすべてに共通して見られるものだが、タッソの作品の場合、センテンスが1行11音節という枠組みの中に収まりきらず次行にまたがるケースが非常に多い。

当時の詩人の見解を確認してみると、16世紀前半の詩人ジラルディ＝チンツィオは、このセンテンスの跨りを、詩人の技術の拙さとして否定的に捉えている。これに対し、世紀後半のタッソは詩行に重さを付与する技法としてこれを高く評価している。両者の評価は正反対だが、前行から次行へのセンテンスの分断が、流暢な詩行の流れを阻んでいると考える点では一致している。1行11音節でセンテンス（もしくは大きな文要素）が完結する場合は、リズムカルな効果によって詩の内容が心地よく耳に届く。また意味の区切れと行の切れ目が一致するため、詩行の理解が極めて容易になる。これに反して、センテンスが前後に分断される場合には流暢な響きが失われると同時に、詩行の末尾と、意味の切れ目とが対応しないために、耳で聞いただけでは内容を瞬時に理解しえないケースが生じてくる。

ソネットのように何度も読み返すことの出来る短詩とは異なり、分量の多い英雄詩は、一定の速度で迅速に詩行を理解しなければならない。一方、センテンスの跨りは、詩行の滑らかな理解を著しく阻害する。したがって、センテンスの分断を一つの技法として意図的に導入できるようになった前提として、11音節という音の枠組みから詩行が外れたとしても視覚によって内容を迅速に把握しうる環境、言い換えれば、文字化された印刷物として目で見て詩を理解できるというコンセンサスが存在していたと考えられる。

センテンスの分断という現象が、詩の受容における視覚的ファクターの出現を示す一つの指標になるのではないか。このような観点から英雄詩の文体を調査しようと考えたのが、本研究の出発点である。

## 2. 研究の目的

行から行への詩句の跨りを調査することによって、ルネサンス期の英雄詩の文体の変遷・センテンスの様態の変化を検証することが本研究の目的である。作品の内容を主観的に解釈するのではなく、形式面の特色を具体的データとして把握することによって、より科学的な文学研究を行なうことが基本姿勢となる。

## 3. 研究の方法

研究の手順は以下の3つのプロセスからなる。

(1) 研究対象となる作品のうち、特にタッソの『エルサレム解放』については普及版テキストの校訂に問題がある。本申請研究は、詩行を1行ごとに検証する作業を伴うため、可能な限りオリジナルに近いテキストを利用する必要があるが、タッソの『エルサレム解放』は自筆原稿が散逸しており、現在に至るまで決定稿といえるテキストが確認されていない。またタッソ存命中に刊行された印刷本は数種類存在するが、詩人によって正式に承認された版は一つもない。さらに、重要と目される印刷本においても、当時の編纂者が勝手に語句を挿入・捏造しているケースが認められる。厳密なテキスト研究を行なうに先立ってこのような問題点を確認しておくことが肝要である。また、該当箇所を実地に検証できるよう、主要な写本・印刷本を収集することも不可欠となる。これらの点について、先行研究を利用しながら正確な情報を集めることが最初の作業となる。

『エルサレム解放』以外の作品については、基本的に、それほど難しいテキスト上の問題は存在しないが、必要に応じて当時の写本・印刷本を参照できるようにイタリア国内の図書館から資料を収集する。

(2) センテンスの跨りの出現頻度を検証するために、この現象を定義することが重要になる。実際に作品を精読すれば分かるが、センテンスが次行に跨るパターンは千差万別であり、その効果を評価するに当たっては、前後に分断される語句の組み合わせはもちろん、語順、文構成、センテンス及び各文要素の長さ、単文・複文の違いなど、無数のファクターを考慮しなければならない。

例えば、行跨ぎのパターン一つを取って見ても、センテンスの分断がどのレベルで生じているのかという問題点がある。研究対象となるルネサンス期の詩の場合、1つの単語が次行から次行へとハイフンで分離するということはありえない。分離の最小単位は、前置詞付きの冠詞 (de la など) / 名詞である。以下、前置詞 / 名詞、名詞 / 形容詞 (形容詞 / 名詞)、複合時制の avere (essere) / 過去分詞、などの分離パターンが当時の作品に確認できる。また、もう少し大きな文要素としては、動詞と目的語、主語と動詞、名詞句と前置詞句などの組み合わせを考えることが出来る。一般に、本来一体となるべき語句が前後に分かたれるケースでは、分離の効果はいっそう大きい。タッソが挙げている事例にも、形容詞 / 名詞という名詞句の分離パターンがしばしば見受けられる。ただ、先に列挙し

たとおり、詩行の分断に関与する因子は多数存在する。その一つ一つを吟味しながら、膨大な分量の英雄詩を漏れなく吟味するには相当の時間がかかる。

そこで、16世紀に書き残された詩行の分断に関する見解をまず確認し、当時どのようなパターンが議論の的となっていたのか、また強い効果をもたらすと考えられていたのかを理解したうえで、そのような問題となるパターン・型を効率的に検証できるように調査方法を設定することが重要となる。

行の跨りに関する当時の見解として申請研究が重視するのは、センテンスが連続して行跨ぎを形成するケースである。タツソは行の跨りについて論じた創作理論の一節で、つまりく箇所（行から行に詩行が分断される箇所）が多ければ多いほど詩行の重さは増すと述べている。実際、タツソが引用している複数の事例に共通する特色として、行跨ぎが連続で生じている点を確認できる。またジラルディ＝チンツィオはアリオストの作品を論じた『騎士物語創作論』の箇所で、8行詩節は基本的に2行単位で展開すると述べ、流麗な詩行の展開を損なう要素としてその2行目の末尾で詩行の跨ぎが発生するケースに注意を促している。この彼の立場は、2行目の末尾で詩行が完結していればリズムカルな流れは損なわれない、言い換えれば1行目の末尾でセンテンスが前後に分断しても2行目で区切りがつかずならば大きな傷にはならないことを含意している。この両詩人の意見を踏まえて、本研究では、詩行の跨りが連続するケースに着目することとする。詩行が立て続けに行跨ぎを形成するケースでは、1行目の末尾に加えて2行目の末尾でも分離が生じることになる。このため、ジラルディ＝チンツィオの言う2行単位で詩行を展開するというパターンから外れた、強いパターンを捉えることが可能になる。

なお、個々の事例については、強い効果をもたらすパターンか否かを問わず、センテンスが何らかの形で行を跨いでいるケースを広くカウントするという立場を取る。

ただし、1行11音節で1つの名詞句、形容詞句あるいは前置詞句といった文要素が完結している場合には、その行の独立性が高くなるため、センテンスの分断が生じているとは見なさないこととする（接続詞＋名詞句という具合に接続詞が入っている場合も同様）。名詞＋関係詞節で1行が完結している場合も同様とする。また、文頭・文末に独立した分詞構文やジェルンディオが配置されるケースも、前後に分かれる効果が小さくなるため詩行の跨ぎとは見なさない。文末・文頭に独立した呼びかけの言葉、挿入句などが置かれる場合も同様とする。

実際に検証を進めていくと、その他にも

様々なパターンが出現する。例えば、主語・述語などの文要素が1行目と2行目ではなく、1行目と3行目に分離するケースが存在する。このようなケースについては別途考察を行う必要があるが、詩行の分離の効果は、隣接する2行の間においてもっとも顕在化すると考えられるために、本申請研究では上記のケースも特に差別化していない。また、語句と語句の関係が曖昧であるためにセンテンスの分離が生じているか否かがはっきりしないケース、語句の解釈によって判断の変わるケースもある。ただ、数値に若干のぶれが生じたとしても、大きな傾向を確認するうえでは支障はないと判断することができる。なお、センテンスの分離に関するその他の定義上の細かな注意点についてはここでは割愛することとする。

(3) 実際に作品を読みながら、上記の基準に従ってセンテンスの分断箇所を特定する。特に連続で跨ぎが生じている箇所をカウントしながら、個々のケースにどの程度強い形の分離が含まれているかを検証する。また、詩行の分断が単発で発生している箇所については、必要に応じて強い形態の跨ぎの出現頻度を確認する。

#### 4. 研究成果

研究手法(1)の調査過程で、トルクアート・タツソの『エルサレム解放』のテキスト・クリティークの問題点を検証した。

今日イタリアで普及している『エルサレム解放』のエディション(カレッティ版)は、タツソ存命中に刊行された印刷本を底本としている。しかし、タツソ自身は、いずれの印刷本の刊行にも関与していない。また、タツソ自身の自筆原稿も確認されていない。他者の手による写本は複数存在するが、それら写本群を系統的に位置づけるのは非常に難しい状況にある。というのも、1575年から76年にかけてタツソが校閲のために自筆原稿をローマに送った際、作品全体をまとめて送付するのではなく、書き上げたところから数歌ごとに送るといったやり方を取ったために、複数のカントが独立した状態で転写され流布していくという状況が発生し、その結果、同一写本の内部でもカントごとに異なる校正段階が混在するケースが見受けられるからである。またカントの順番と、写本への転写の順番が、必ずしも一致していないという状況も生じている。写本そのものがこのような混成的性質であるために、写本間の相違を整理して各テキストを時系列上に位置づける作業も困難を極めることになる。このような写本内部、写本相互、それに写本と印刷本の間複雑な関係を、最新の研究成果を精査しながら確認した。その結果、今日普及して

いるカレッティ版のテキストには、タツソが初期の推敲段階で棄てたはずの語句（あるいは挿話）が混入していること、また詩人が推敲過程で空白のまま残した複数の箇所を、当時の編纂者が捏造した語句で埋めている可能性が高いことなどの問題点を把握した。これらは今まで一度も日本国内で取り上げられたことのない問題である。また、先行研究の詳細な指摘にもかかわらず、イタリア国内で今なおカレッティ版を無批判に踏襲したエディションが新たに刊行されている状況を考え合わせると、上記の問題点の確認はいっそう重要な意味を持つといえる。

センテンスの分離の頻度については、『エルサレム解放』の全20歌（8行詩節1917連）、及びこれと同程度の分量となる『狂えるオランダ』の前半23歌（同2332連）、プルチの『モルガンテ』の前半18歌（同1873連）を対象に検証を行なった。その結果、分離が生じている箇所は、プルチ、アリオスト、タツソの順にそれぞれ、合計968、2394、3303という数値となった。2箇所以上連続でセンテンスの分離が生じているケースは、それぞれ、51、118、89箇所である。うち3箇所連続でのセンテンスの跨ぎは、5、26、28箇所、4箇所以上連続する跨ぎはいずれの作品にも確認できなかった。

比率を比較すると、センテンスの分離は『モルガンテ』で1連につき約0.5箇所、『狂えるオランダ』では1連当たりおよそ1.0箇所が生じている。これに対して『エルサレム解放』では1連につき1.7箇所の分離が確認できる。また2箇所以上連続で分離が生じる割合は、プルチの作品でおよそ37連に1回、アリオスト、タツソの作品でそれぞれ20連、22連に1回となった。また3箇所連続での分離は三作品それぞれ、375連、90連、68連に1回の頻度という結果になった。

連続で詩行の跨ぎが生じる箇所について強い効果をもつ分離パターンの出現頻度を確認してみると、形容詞／名詞（あるいは名詞／形容詞）の分離は、プルチ、アリオスト、タツソの順にそれぞれ0、17、13箇所となった（連続跨ぎの総数に対する比率はそれぞれ0、0.14、0.14）。また前置詞／名詞（あるいは前置詞／前置詞＋名詞）の分離はそれぞれ1、2、2箇所となった。

作品の内容と詩行の形態との関係を少し単純化して概観すると、プルチの民衆的な騎士物語から、アリオストの洗練された騎士物語を経て、タツソの重厚な叙事詩へと時代を下るにつれて、詩行の跨ぎの頻度は増大する。節や語句が単純に1行ごと完結する構成に対して、必要に応じて1行を跨ぎながら単語を加えたり差し引いたりすることのできる形式は、微妙な陰影や複雑なニュアンスを表現

しやすしいといえる。詩行の跨ぎという形式の普及は、このような内容の広がりや深化を促す要因の一つだった可能性がある。

またアリオストとタツソを比較すると、詩行の分断の出現頻度は圧倒的に後者の作品で高いのに対して、複数連続する跨ぎの頻度は前者と後者でほぼ同数となっている。この結果が正しいとすると、タツソの場合、重さを付与する技法として詩行の跨ぎを多用する傾向がある一方で、センテンスの分断が複数に及ぶ形態については一定の節度をもって対処していたと推測することができる。

今回調査した詩行の跨ぎの出現頻度については、個々のケースをさらに詳細に分析する必要があるが、センテンスの分断箇所に着目したルネサンス期の英雄詩の形式研究は、国内はもちろん海外でもあまり例がない。この点で本研究は一定の成果をあげることが出来たと言えるだろう。

なお、今後の展望としては、収集したデータをさらに充実させたうえで作品の場面に応じて行跨ぎの出現頻度を詳しく分類すること、及び直接話法と地の文という設定の違いに応じて分離パターンを整理することによって、新たな知見を得ることが期待できる。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

① 村瀬有司、「『エルサレム解放』の印刷本の諸問題」、『イタリア学会誌』、査読有、58号、2008年、pp. 173-96

〔学会発表〕（計1件）

① 村瀬有司、「『エルサレム解放』の写本・印刷本の概観 - Caretti 版の問題点について -」、イタリア学会、2007年10月20日、東京大学（駒場キャンパス）（東京）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

村瀬 有司 (MURASE YUJI)

大阪大学・世界言語研究センター・准教授  
研究者番号：10324873

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし